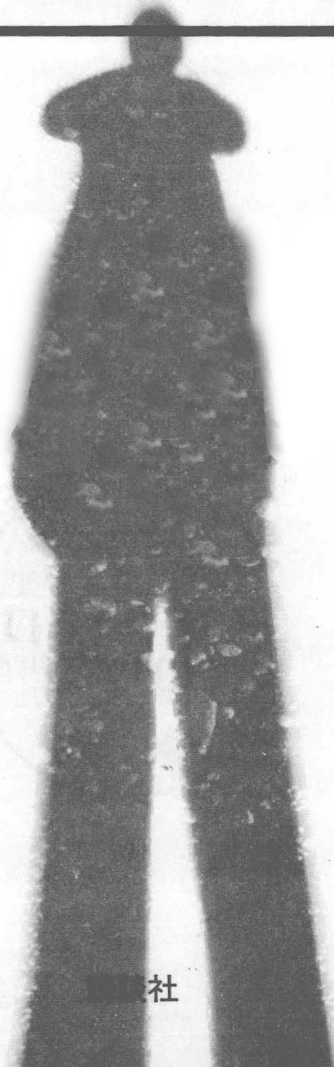


日本推理作家協会編

ショート・ミステリー傑作選



講談社

ショート・ミステリー傑作選 日本推理作家協会編

定価 八八〇円

第1刷 昭和53年2月24日

著者 飛鳥高ほか

編集委員 石川喬司 加納一朗 佐野洋 都筑道夫 星新一

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表) 振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

© 一九七八 日本推理作家協会

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。

Printed in Japan

目次

埋める	飛鳥高	5
結婚	鮎川哲也	9
遺伝	生島治郎	13
逢いびき	石川喬司	16
目撃者	石沢英太郎	19
死刑台の男	井上ひさし	26
条件反射	大谷羊太郎	32
狂気の系譜	大貫進	38
お客様	大藪春彦	45
帰郷	海渡英祐	48
今度は死刑	笠原卓	51
イチゴという名の女	このこ 片岡義男	54
新銀金色夜叉	加納一朗	56
ヤバイ日	川上宗薫	58
火の色	菊村到	63
窓	樹下太郎	68
遠い美しい声	小泉喜美子	72
鳥のイメージ	河野典生	75
透視	小鷹信光	77
不安な耳	小林久三	78
コップ一杯の戦争	小松左京	86
女樹	斎藤哲夫	89
老人の予言	笹沢左保	94
投書狂	佐野洋	101
確率	柴野拓美	106
猿羽根峠	島田一男	107
怪奇製造人	城昌幸	113
命令	多岐川恭	116
家族日誌	滝原満	121
アルプスの密室	陳舜臣	124
客	筒井康隆	131
雷雨	都筑道夫	133

夜の勝敗 土屋隆夫 141
 新妻のにおい 戸板康二 146
 雨 戸川昌子 153
 良い名前 豊田有恒 155
 鬼―新釈伊勢物語 中藺英助 158
 ある失踪 夏樹静子 165
 或る善良なる青年の出納簿 西川清之 171
 赤い斜線 半村良 172
 ドッグ・フード 藤村正太 179
 なぞの青年 星新一 185
 左下三番 松尾糸子 188
 入所命令 眉村卓 191
 愛 宮崎惇 194
 名医の診断 三好徹 199
 切腹一分前 武蔵野次郎 203
 途中下車 森村誠一 207
 鳥の死なんとするや 山田風太郎 213

蝶螺 山村正夫 217
 変身 山村美紗 223
 絶対反対 結城昌治 225
 飾り窓の中の恋人 横溝正史 229
 三吉の食慾 渡辺啓助 234
 怪盗鼠小僧 和巻耿介 241
 初出紙・誌一覧 247
 解説 星新一 249

イラストレーション 装幀
 村山豊夫
 関野弘美

シ
ョ
ー
ト
・
ミ
ス
テ
リ
ー
傑
作
選

編集委員

石川喬司

加納一朗

佐野洋

都筑道夫

星新一

埋める——飛鳥高

1

物音に河井は浅い眠りから覚めた。事務所のガラス戸が開いたようであった。しかし目が覚めて見ると、それより前に、表に自動車止まる音が聞えたような記憶が、ぼんやりした頭の中に残っていた。

シャツ一枚で寝ていた河井の胸や頸筋には、じつとりと汗がにじんでいた。電灯を消した宿直部屋の中には、新しい木の香としめった重い夜気とがひっそりと満ちていた。足音がした——。

今度は、河井はぱっと上半身を床の上に起した。足音は隣りの事務室の木の床を踏んでいた。河井は一人で現場事務所に宿直しているのだ。現場事務所は、港に面した埋立地の護岸工事のためのものであった。大都會のすが汚れた海に浸ろうとする所——あたりに人の住んでいる所もない。人間が土を運んで作り上げた不細工な荒々しい地表の上に、煤煙と潮の香の交った疲労し切った空気が、けだる

く沈んでいるだけであった。

深夜この事務所にはいつてくる者があるとすれば、それは遊びに行っていた主任が、何かの都合で帰って来たのか、そうでなければ無人を承知で忍び込んで来た何者かであろう。河井の耳にはいった足音の様子は、その後の者に似ていた。しかし物音はそれだけではなかった。気がつくのと外の方にも、数人の者の動いている気配がしていたのだ。

河井の心臓を恐怖が握りしめた。——何者かがこの工事現場をねらって襲って来た——。しかし一体何の目的であろうか。工事現場にある器材を盗むためであろうか。しかし河井の感じた周囲の気配は、そんなこそ泥のようなものと少し違っていた。もっと落着いた、組織的な、——その代りもっと冷酷な感じのものであった。

恐怖で熱くなった河井の頭脳は、直観的にこの事態が主任と何かのつながりがあるに違いないと感じた。河井がこの工事場に臨時工で雇われてから一月ばかりしかたつてい

なかったが、主任の岸川は、工事の仕事以外にも何か個人的な仕事を持っているようであった。その仕事がどんなことか河井にはわからなかったが、岸川がつき合っている相手は、派手な与太者ふうの男たちであった。そこに何かしら危険な関係があるようであった。彼らが岸川主任の仲間なのか敵なのか、それはわからなかった。

いま、この深夜、この事務所を取り巻いているもの、それは彼らであろう——。そして結局彼らは、岸川の敵であったのではないか——。河井は、なすべきことがわからなかった。彼は、二十にもならない臨時工の自分が、そんなに彼らの邪魔になるはずはないだろうということを、汗ばんだ手を握りしめながら念じていた——。

境の戸ががらつとあけられ、事務室の明りが流れ込んだ。明りは、河井のおののいている顔に正面から当たった。

2

「小僧、眼を覚したな」

一人の男が境の所に現われた。厚い布で顔を包んでいて、声は不明瞭な低い含み声で、聞き取りにくかった。河井は、背に明りを受けた男の影を息をつめて見上げ、少し口を開いたが声は出なかった。

「少しの間静かにしてな」

男は、イスを引き寄せて、そこへ腰を下した。彼は河井

を監視しているつもりらしかった。外での物音がやがてはつきり聞えて来た。それは河井の聞き馴れた音であったので、容易に何をしているのか判断がついた。——スコップで土を掘ってはねている音であった。時に小石がスコップに当る、カチ、カチという音がしていた。

「外のことを気にするな」

河井の眼が音のしている方へ流れようとすると、男は察したように、そういった。

「小僧」男はさらに押えつけるようにいった。

「今夜のことを、あすの朝まで憶えてると、おめえの命にかかわるぜ。明日は、コンクリートの壁の後を埋め戻すんだろ？ その通りにやるんだぜ——わかったな」

河井は、黙ってこっくりをした。彼は眼を前に落した。しかし頭はめまぐるしく動いていた。

——土を掘っている。何か埋めるのだろうか。多分擁壁の後側だろう。擁壁のコンクリートを打つために大きく掘っている。明日はそこへ土を埋めて平らにしてしまう。それを承知でそこへ何かを埋めているのだ。——何だろうか、よほど人目に触れては具合の悪いものなのだろう。恐らく永久に人目に触れさせないためにそうするのだろうか。——そのために彼らはここへやって来たのだ。——一体何を埋めるのだろうか——。

「早くしないと、主任が帰ってくるかも知れない」

河井はいった。彼は本気でそう思っていたわけではない。男はちよつと彼の方を見たが、あざけるように、ふんと笑った。

「帰って来はしないよ。——大丈夫さ」

それはあざけりとともに、落着いた自信を持った声であった。河井は自分の試みが成功したことを感じていた。それとともに、彼の心臓は一層の重みに押しひしがれて、彼は嘔吐を催しそうな不快感を覚えた。彼は手を前について体をささえていた。

土を掘っている物音はなおも続いていた。人のはく荒い息づかいさえ聞えてくるようであった。男も、外の仕事の具合を感じ取ろうとするようにその方へ耳を傾けていた。

彼はイスの背を前にしてすわり、その背の上に両腕を組んでのせていた。後から射している光線が組んだ腕の片端に当たっていた。大きい腕時計が光っていた。河井と男との距離は二間ばかりあったので、それがどんな時計か正確に見定めることはできなかったけれど、河井には、それが何時も岸川が自慢にして持っていた外国製の高級時計とバンドから何からそっくりに見えた。

河井は、一つの筋道を組み立てていた。彼らがこの現場を選んで深夜埋めようとしているものは、外に何があるのか。——岸川は帰って来ない。彼らはそのことに自信を持っている。そして岸川から奪った腕時計を持っているとし

たら、埋められるものは岸川の死体でなくて何であろうか。岸川と彼らとの間に、何か間違いが起きてしまったのだ。

河井は恐怖のために全身が干からびていたが岸川が殺されたと考えても、別にあわれみも悲しみも起きなかった。岸川は河井をあまり大事に扱わなかった。岸川は出所の不明な金を始終持っていたが、河井はその恩恵に浴さなかった。さらに、河井は工事現場の仕事がそろそろいやになっていた。河井にとって、もし彼らが河井をそつとして置いてくれば、ほかのことはどうでもよいことであつたのだ。河井は、彼らが早く仕事を済ませて静かに去って行つてくれることを祈っていた。

やがて、外の物音がやんだ。こちらへ近づいて来る人の足音が聞えた。足音は建物を回って事務所の入口へはいつて来た。坐っていた男は、そのまま首を後へ回した。そしてうなずくと、イスから立ちながら河井の方へ向いた。

「いいかい、今夜のことは何も憶えているんじゃないぜ。手前の命が惜しかったらな、小僧」

河井は、黙ってまたこっくりをした。事務所で、戸をあけるような音がしていた。男は河井の前から消えた。やがて数人の者の足音が事務所を出て、自動車のエンジンの掛る低い音がした。

河井は、物音が去つても、しばらく体を硬ばらせて、じつとそのままだにしていた。一応の危険は去った。しかし彼をとらえている恐怖は完全に拭い去られてはいなかった。今夜以後、ここにいる彼は、どこからか監視されているに違いない。もし彼の行動が気に食わなかったら、彼らは再び彼の前に現われるかも知れない。その時は……。

逃げよう——。彼がそう思った時、彼の足は立ち上つていた。もともと身寄りの知れない無宿者であつた。逃げる時の判断は早かつた。一つの仕事についている時の彼よりも、仕事を捨てて逃げる時の彼の方がはるかに生き生きとしているのはやむを得ない習性であつた。そして逃げるには金が必要——。

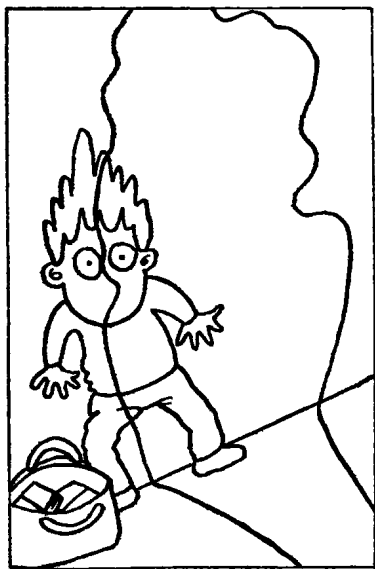
河井は事務所にはいつて、岸川の机の所へ行つた。岸川は死んだ。彼がどれだけの金や物を持っていたか、誰も知りはないだろう。机の引出しには大したものはない。後、後の戸だなをあけた。革のカバンがはいっていた。岸川の持物だ。河井は机の上にカバンを出して開いた。紙幣の束がはいっていた。何か粉末のはいったガラスびんもあった。河井は眼を見張つた。紙幣の下に黒い拳銃が横たわっていた。入口のガラス戸が、がらりと開いた——。

息をつめて顔を上げた河井の正面に、岸川が立っている。

た。

「おめえの様子を見て戻つて来てよかつたぜ。ちょっとあぶねえ気がしたからな。おめえは何か勘違いしたかも知れねえが、そのカバンを今掘り出した所なんだ。おれはなるべく手荒なことはしたくねえと思つて、お前に今夜のことは忘れるといつたんだが、その麻薬とはじきを見られたんじゃ、しょうがねえじゃねえか、なあ河井。やつと掘り出したと思つたのに、また埋めなきゃならねえものができてしまつたぜ」

岸川の大きい体は、ゆっくりと動いて河井の前へ近づいて来た。



結婚——鮎川哲也

私立探偵はやせた、角ばった顔をしていた。レンズの奥に入なつこい目がわらっている。わたしより十歳あまり若いだろう。

「約束の日だ、リポートを持ってきたらうね？」

少し詰問する口調になった。

「ジュエル探偵局は決して契約違反はいたしませんでございませう、はい」

探偵は真赤な大型封筒から、一枚のタイプした用紙をとりだしてみせた。

「あなた様が悪執心あそばしたお嬢さまの家をつきとめまして、先方のは十八気筒のすごいものでしたから、尾行するにはそれはそれは手間どりましたです、はい」

「苦心談は結構だ、先を話したまえ」

わたしの心臓はもうわくわくしどおしで、のんびんダラリと冗漫な報告を聞いていることが苦しいほどであった。彼も名探偵ならば名探偵らしく、おんぼろ車はボンコツ屋

に払いさげて、二九六二年型の新車を買ったらしいではないか。

「はい。それに、わたしの鼻の先で門のとびらが閉ってしまいましたもんで、塀をのりこえねばなりません。どうにか苦勞をしまして、乗りこえたんですが、ヒョイと下をみますと、番犬がわりの人造ブルドッグが、齒をむきだしてにらんでいるではありませんか。胆をつぶした拍子に、ころげおちまして、左脚捻挫、右手を噛みつかれてしまいました」

「そんなこと、自慢にやなるまい」

「いえ、それやこれやで、調査費を二三パーセント値上げして頂きたいんでして、はい。さて、山のような難関を突破しましたのち、このお邸がジュリエッタさまとお母さまの二人住いであることを調べ上げました」

「お、おい。ジュリエッタは、す、すると独身なんだね？」
わたしの声がちよつとふるえた。いくら相手が美人であっても、亭主持ちでは求婚するわけにはゆかんではない

か。この点が何よりも気がかりだったのだ。

「はい。お母さまのほうはヘルタさまと申しまして、こちららは未亡人でございます。なんですか、お一人で旅行中に、旦那さまはお邸で亡くなられたとか、ヘルタさまは帰国されて、それは悲嘆にくれられたそうで……」

ヘルタなんてどうでもいいんだ。わたしは喉まで出かかった言葉を、辛うじてのみこんだ。やがては義理の母ともなるべき人の悪口は言うべきではないと思ったからだ。

「つぎに、資産でございますが、これがまた莫大な金額にのぼりまして、まず不動産として山林——」

「いいんだ、ぼくは金が目当ての結婚じゃない」

たしなめるようにわたしは言った。ほんとにそうなのだ。彼女がたとい一文なしの乞食であつたとしても、わたしは少しもためらわずに求婚するであらう。

推理作家のわたしは、ある出版社から書きおろしの長篇をだすために、木星へ取材旅行をした。その往路のロケットの中で、この女性と隣りあつて坐つたのである。わたしは地球から木星に到着するまでの数日間を、ちよろちよろと横目をつかつて、この美しい婦人を観察しつづけていた。年齢は二十七、八だろうか、現代では人種の特長などというものはほとんど見られなくなつてしまっているが、彼女の茶色の眸はあきらかに東洋人の血をひいている証拠だつたし、それに加えて、ヨーロッパ人の金髪と、アフリカ

人のしなやかな珈琲色の皮膚をもつていた。

あとで気づいたことだけれども、このときばかりは騒音に敏感なはずのわたしが、木星に着陸するまで少しもロケットのうなりにわずらわされることがなかった。それほど、彼女の美しさに参つていたのだ。同行している母親らしいヒキガエルのような醜い女から受ける不快感を、わたしが少しも意識しなかったこともまた、このわかい婦人の美しさ、かぐわしさのためであつた。

わたしはこの齢になるまで女に気をひかれることは絶えてなかったが、そんな男にかぎつて、ひとたび恋の味を知つたが最後、もうどうにも心の収拾がつかなくなるようだ。それ以来わたしは一枚も原稿がかけなくなり、雑誌社、はもろろんのこと、取材費を提供してくれた出版社から、やいのやいのと執筆の催促をうけていた。だが小説のプロットをたてていると、思ひはいつか彼女のほうにそれてゆくのだつた。

体温は昇りつばなし。疲れやすくなる。大好きだったワントンメンを見るのも嫌やになるといふほどの変りようだ。そこで恥をしのんで、私立探偵に一切をうち明け、相手の調査を依頼したわけである。

「しかし、なんですな。先生も少しのぼせすぎてやしませんか。慌ててご結婚なさいますと、きつと後悔なさいますよ」

「大きなお世話だ、余計なこと言わんでもよろし」

私立探偵の分際ぶんざいでなにをぬかしおるか、チョコザイナと思つたから、きつい調子になった。

「いや、わたしは経験者ですから言わせて頂きますです、はい。それがわたしの責任でもございますので。われわれの世界連邦の民法では、一度結婚したものは死ぬまで離婚することができないのでございますよ。もう少し慎重に考えなさつては如何でございましょうか、はい」

「うるさいね、きみは。そんなつまらぬことを喋るより、酒でも飲んで黙っていてくれ」

「いえ、用がすんだらすぐ帰ります。じつは車に家内をまかせているもんですから、はい。先日もお酒を頂いてゆつくりすぎたもんで、後で助手台の女房にうんと叱られましてございます。わたしみたいな愛妻家でさえ、こんな女をなぜ嫁にもらつたんだらうかと、ときどき口惜しがることもありますんでございますよ、はい」

探偵はそうまくし立てると、請求書をわたしの前にそつと置いて、帽子をつかんで出ていった。ふん、恐妻家が愚にもつかんことを言いおつて。わたしはにがい顔で彼のやせた後ろ姿を見おかつた。

その四日後に、わたしはタキシードを着用してジュリエッタの家をたずねた。すでに正式に書面をもって求婚をし、先方からも、よろこんで受諾する旨の返書がとどいて

いる。これで婚姻が成立するのだから、万事がスピーディで有難い世の中である。わたしは花屋で火星の運河のほとりに咲く蘭の花束を買つたが、新郎が花嫁の許にこの花を持ってゆくのは、史家に言わせると二十五世紀の初頭以来の習慣なのだそうだ。

空には惑星や星雲がかがやいていた。わたしはむかしの人間のようにロマンチックなものの考え方はしないたちだつたけれど、その夜はややもすると、惑星どもがわたしたちの結婚を祝福してくれているような甘い気持がしたものだ。

教えられた番地には、探偵が言つたとおり大きな石塀をめぐらした広大な邸宅があつた。門柱にはめこんだタルビニウムの金属板には、ヘルタとジュリエッタの名が刻みこまれてある。人造ブルドッグは電源を切られていたためか、小屋の前にべたんと寝そべつて、わたしが通つても顔をあげようとしなかった。植込みの砂利道をぬい、入口の扉の前に立つた。

「まあ、よくいらつしゃいました。嬉しゅうございますわ」「ぼくも嬉しいです、ジュリエッタさん」

わたしはそう言おうとしたが、舌がこわばつて言葉にならなかった。膝がしらがガクガクして立っていることが出来ない。案内された広間のソファに、くずれるように坐つた。

わたしのとなりに彼女も腰をおろした。今夜は純白の絹のドレスを着ているせいとか、瓜実顔はかがやくばかりの美しきで、大きな杏色の眸でみつめられると、もうそれだけのことで息がつまりそうになる。

「ああ」

そっと唸った。しまり肉のからだをギュッと抱きしめたかったが、辛うじてこらえた。あと数時間の辛棒だ。食事をすませて寝室に入れば、抱こうが頬ずりをしようが思いのままではないか。

「ああ、ぼくは幸福です」

わたしは不器用に叫んだ。こんな場合にどのようなセリフを言えいいのか、恋愛小説に興味のないわたしには解らなかったのだ。

「ええ、あたくしも幸福ですわ。あなたのような方をお婿さんにするのが出来て。ジュリエッタ、何をしてるの、早くいらっしゃい」

奥へ向けて彼女が声をかけた。

ジュリエッタ、早くいらっしゃいだって？ 私は聞きとがめる目になった。

「すると、あなたは……」

わたしは腰をうかせた。

「いいえ、あたくしヘルタ。ジュリエッタの母親でございます」

「えッ」

「生んで間もないあの子を夫にあずけて、あたくしは余儀ないことから光子ロケットで土星へ旅だちましたの。ところが機関に故障をおこしたとかで、ユブシロン遊星まで行ってしまったのでございますよ。何十年ぶりかでようやく地球にもどって参りますと、まあ何と悲しいことでございましょうか、愛する夫は老いさらばえて亡くなっております。娘も婚期を失って、あの齢まで独身で……」

ヘルタは絹のハンカチでそっと目がしらを押え、お目出度い夜に涙などがして申しわけないと優雅な身ぶりです謝った。

そう説明されてわたしは、光の速度で宇宙をとんでいくと、時間の経過が地球上のそれに比べて遅くなるという理論を思いだした。小学校の物理の時間におそわったことだった。ユークリッドだったかな、ニュートンだったかな、それともアインシュタイン……。

ショックを受けたわたしの頭は、もはやそれを思い起すことさえ出来なかった。

扉があき、山椒魚がウェディング・ドレスを着たようなジュリエッタがあらわれた。しわだらけの顔におしろいをベタ一面にぬりつけ、歯がぬけてすばんだ口に真赤なルージュをぬりたくって、大きな金のイヤリングをぶらさげている。

「おお、あたしの夫——」

ひからびた声で叫ぶと、小走りでもチヨチ部屋をよこぎ

遺伝——生島治郎

「どうでしょう、母のぐあいは？」

あたしは、前に立つて廊下を案内してゆく看護婦の背中に声をかけた。

「そうですね。別にお変りありませんわ」

若い見習い看護婦は、まだすっかりこの職業になれ切っていないらしく、うしろをふりかえると、ちらと気の毒そうな表情を浮かべていった。

「そうですね」

あたしはため息を吐いた。母が精神に異常をきたして、この病院に入ってから、もう三年になる。この病院は私立で、設備はすばらしくいいのだが、とにかくお金がかかる。一流のホテルの一室をずっと借りきっているぐらいの

って、ひととばかりわたしにかじりついた。

お金がかかるのだ。おかげで父が残してくれた財産も、もうすっかり残り少なくなってしまった。

看護婦は廊下の突きあたりで立ちどまると、扉の鍵を開けた。

「どうぞ。患者さんはいま、お食事を終ったところで、おやすみになっているかもしれません」

あたしは、せまい入口を抜けて、病室に入った。右側に浴室とトイレがならび、奥は三坪ほどの明るい個室になっている。片側にベッド、その枕元にはテレビ、そして、そのわきには応接用の三点セット——もし、窓に鉄格子がはまっていなければ、誰が病室だと思うだろう。母自身も、自分がきちがいだなどとは思っていないのだ。

母はベッドに横になっていたが、人が入ってくる気配にうす眼をあけた。

「おや、アキ子かい。よく、きておくれだね」

母はいそいそとベッドから起きだすと、あたしに向かいあつて、ソファにすわつた。

「お母さん、気分はどうなの？」

あたしが訊くと、母はにこにこ笑いながら、手をふつてみせた。

「気分は上々なんだけど、退屈でねえ、あたしはどこもわるくないんだから、早くここから出してもらいたいんだよ。そりゃ、こうして一日のんびりしているなんて結構なご身分だとはおもっているよ。でも、お金だつて大変だろうし、これ以上、おまえに迷惑はかけたくないしねえ」

「そんなこと、なんでもないのよ」

あたしは強いて元氣そうにいった。

「お母さんは、自分で気がつかないけれど、やつぱり病氣なんだから、すっかり直るまでちゃんと養生しなきゃ」

「そうかねえ、どこもわるくないみたいなんだけどねえ」

母はそういいながら、立ちあがるとあたしにお茶を入れてくれた。その手つきも昔のまま、しゃべることもごく普通通だし、あたしにむかつてほほ笑みかける表情も普通の母だった。こうしているかぎり、母の精神に異常があるとは考えられなくなってくる。

あたしは、母の様子があまりにまともなので、恐れていた質問をする氣になった。

「それで仔豚ちゃんはどうしているの？」

急須きゅうすを持っていた母の手がびたりととまり、急に眼つきが空になった。

「仔豚ちゃんかい。あたしのかわいいかわいい仔豚ちゃんかい。いるじゃないか、ほらそこに。赤いリボンを首にむすんでさ」

母は、少女のようにうわついた金切り声をあげると、しわだらけの指先であたしの足元を指さした。あたしは、思わず自分の足元を見た。しかし、そこにはグリーンの敷物が敷いてあるきりでなにもいなかった。

「おいで、仔豚ちゃん。さあ、ここへ」

母は、空間に向かつて手まねきし、自分のひざをたいた。そして、なにか小さなものがひざにかけあがつてきたかのようなそぶりを示し、それをつかまえて、頬ずりしている様子をしてみせた。ほんとうに、仔豚がかわいくて仕様がないうに。

先ほどまで、かすかにともっていたあたしの胸の灯が、ふっと消えていった。

あたしは、ソファから立ちあがつた。

「お母さん、あたし、ちょっと寄ってみただけなの。もう、帰るわ」